

八重山諸島に蝶を訪ねて

黒井和之

I) 10月10日 石垣島から西表島へ

足立・黒井・谷角・前平の面々を乗せた船は、石垣港を離れ、次の採集地である西表島へ向かった。

西表島は、周囲約77km、面積322km²の島である。石垣島の人口がおよそ4万3千人であるのに対し、それより大きな島である西表島の人口は、およそ2千人。それは、島内の約90%がうっそうとした原生林でおおわれ、人間が生活を営むことのできる地域が限られているためである。

西表島には、船の定期便が入る港が3か所ある。東部の大原港、西部の船浦港と白浜港である。現在のように東部と西部が幹線道路で結ばれていなかった昔は、東部から西部へ行こうと思えば、一度石垣島に渡ってから、また船で西部に行かなければならなかったようである。現在は、アスファルトの横断道路が東部の豊原から西部の白浜の集落まで開通しており、西表島をほぼ半周することができる。

大原港には夕刻近くに着いた。石垣島でレンタカーの手配をしていたので、港に車が迎えにきていた。いつ訪れてもこの島は静かである。会う人たちの表情の穏やかなこと。のんびりとしたたたずまいに、何ともいえない気持ちにさせられてしまうのは、私だけではないだろう。レンタカー会社で事務手続きを終え、私たちはその夜の宿泊先である南風荘に向かった。

宿に荷物を下ろした私たちは、まだ夕暮れには少し時間があるので、仲間川林道に行ってみることにした。注意深く林道沿いを見るが、時間が遅いのか蝶の影がない。車を停め、仲間川の展望台に続く遊歩道を歩くことにした。展望台で壮大な亜熱帯の景観に見とれているとき、近くで足立氏が「蝶がいるぞ」と声を上げた。こんな薄暗い樹林内にいる蝶といえば、リュウキュウウラボシシジミカリュウキュウヒメ・マサキウラナミ・ヤエヤマウラナミのジャノメ類ぐらいなものである。「どんな蝶？」と聞き返すと、スダジイの葉上に止まっていて、ゼフィルスに似ているという。長竿を持った前平氏が駆けつけ、ネットインに成功した。何とイワカワシジミだった。今回の採集行で唯一の採集品となった貴重なものである。私は今回で当地を3度訪れながら、本種を自分の手で採っていない。三角

紙に収められた個体を見ながら悔しい思いをしたことはいうまでもない。

その夜の宿泊先である南風荘の印象については、山本一幸氏が本誌前号に詳しく書かれているので、くどくどとは書かないが、何といたっても特筆すべきは、食事の豪華な内容である。豪華といってもステーキやスープが出てくるわけではない。食卓に並んだものすべてが、といっても過言でないほど、島内もしくは近海で採れたいわゆる地物で、そのひとつひとつの料理に温かい真心が込められていた。この宿の御主人に、皿に盛られた料理の材料を質問しながら、八重山の郷土料理に舌鼓を打った。

Ⅱ) 10月11日(1)西表島の日(時間との戦い)

—白浜・白浜林道・星立・月ヶ浜・船浦—

朝8時すぎ、薄日が射す天候のなか南風荘を出発し、西部に向かって車を走らせた。行き交う車も少なく、左に亜熱帯の林を、右に海岸線を横目にしながら、私はハンドルを握っていた。しかし、今日一日の採集のことを考えると周りの風景をゆっくり見る余裕がない。気持ちは、これから目指すポイントに飛んでいた。つついアクセルに力が入り、法定速度の倍近いスピードで走っていた。その度に車内で苦言が出る。車の前をシロオビアゲハやカラスアゲハ、マダラの類が横切っていく。「今日一日、良い採集日になりますように」そんなことを考えているうちに、車は第一の目的地、白浜の集落に着いた。

何といたっても、この地の採集目標はテツイロビロードセセリとシロウラナミシジミであろう。前種は、白浜小学校近くにある食草デリス(Derris)の群落地で比較的採れている種である。私も '85年春に2頭採集している。後者もその近くで採れている。しかし今回は、両種とも、目撃できなかった。また、過去2度の訪問で小学校付近の荒れ地で多数目撃・採集しているアオタテハモドキの姿も、今回はまったく見ることはできなかった。前日、石垣島のポイントでも蝶の個体数が極端に少なかったが、西表島も同じだろうかと一抹の不安を感じた。

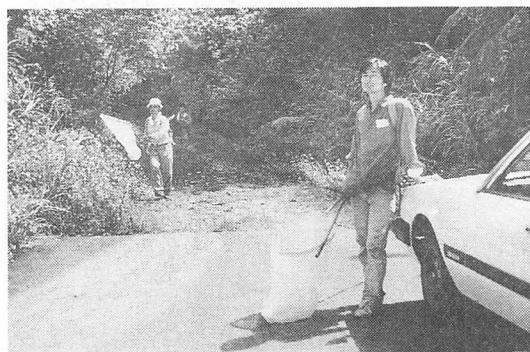
白浜の集落は、これまで私が訪れた八重山の島々のなかで最も好きなおところである。私は '84年にこの地に一泊した。白浜は、天然の港を持っている。港内には小さな小島が多くあり、夕暮れ時になると海面から小島の間にもやがかり、神秘的なたたずまいを見せる。「2～3か月、この地に住むことができればいいのに」そんなことを考えながらぼんやりと、魚釣りをしている人を眺めていたの

を思い出した。

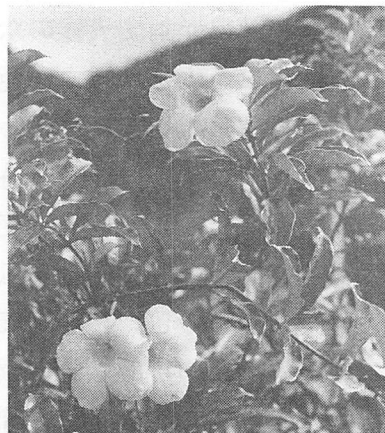
午前10時すぎ、白浜の集落からつづらおりの小さな峠を登りつめたところにある、白浜林道のポイントに車を走らせた。

白浜林道は、西部大富の仲間川林道に通じている西表島縦断のルートである。縦断に要する時間は約8時間ということだが、私たちにそれを試みる時間など、この限られた日数のなかにはない。

林道入口に車を止め、歩くことにした。入口を少し進んだ樹林帯では多数のクラスアゲハが次から次へと林道上に出てきた。それから先で、シロオビ・アオスジ・ジャコウ・ベニモンのアゲハ類や、スジグロカバマダラ、リュウキュウアサギマダラ、タテハモドキ、ルリウラナミ・ウラナミ・アマミウラナミのシジミ類やマサキウラナミ・リュウキュウヒメのジャノメ類とコウトウシロシタセセリなどを採集した。



白浜林道の入り口で蝶を追う前平氏(左)と黒井氏(谷角撮影)



白浜集落に咲いていたアラマンダの花(谷角撮影)



竹富島へ向かう船のギャル(谷角撮影)



ギャルを見て、ニヤける黒井氏と照れる前平氏(谷角撮影)

次は、星立の集落に向かった。目的の蝶は、竹藪の住人(?)シロオビヒカゲである。ここでも、どうしたことか姿すら見るができなかった。この日、どのポイントを回っても蝶影が薄い。「どうなってんの」とひとり言をつぶやくことが多かった。食べたものが消化不良をおこしたような、何とも晴れ晴れしない一日になりそうな雲行きである。目的の蝶を採集することもできず、20~30分で切り上げた。

正午を少し過ぎて、私たちは月ヶ浜に向かった。このポイントでの採集目的はタイワンキマダラである。この種は近年、月ヶ浜周辺に確実に土着したようで、毎年かなりの個体数が採集されている。この日も限られた時間内に各人が採集できたようであった。我々は次なるポイントを目指した。

船浦の集落から山手に向かうと、一面にパイン畑が続いている。これから収穫期に入るのだろうか、見なれたものよりもひとまわり小さいパインが実をつけていた。畑の所々に腐ったパインがあり、その中にクワガタが入っているのだという。本州以南に広く分布するヒラタクワガタの亜種で、八重山諸島産はサキシマヒラタクワガタと呼ばれている。大きい個体になると70mmを超えるものまでいる。西表島や石垣島には、サキシマヒラタクワガタのほかに5種のクワガタが分布している。そのなかにタテヅノマルバネクワガタという種がいる。こちらは、現在でも珍品の域を出ていない甲虫で、とくに大あごの発達した大歯型は、クワガタに興味ある人にとっては憧れの的である。タテヅノマルバネに比べ、サキシマヒラタは比較的採集が簡単で、今回のパイン畑を訪れるきっかけとなったのも、谷角氏が'85年の秋にこのパイン畑で多数の個体を採集した実績があったからである。今回の採集行でクワガタに血道を上げていた足立氏への配慮もあった。実をいえば私も秘かにクワガタに色気を見せていたが、...しかし結局は、前平氏が1匹採っただけに終わった。

クワガタに夢中になっているうちに、西表島での予定の時間も残り少なくなってきた。八重山の各島でネットを振ろうと思えば、3泊4日ではあまりにも短すぎる。しかし、各自がそれぞれ仕事を犠牲にしての採集行である。各ポイントを分刻みで回り、目的の蝶を1頭でも多く採集しなくてはならない。時間は待ってはくれない。船浦を出て東部に向かって車を走らせた。

次の訪問地、竹富島行きのフェリーの出航時間は午後2時20分、それも東部の大原港からの出航である。このフェリーは、竹富島經由石垣港行きで、これに乗

り遅れると石垣港まで戻ってから竹富島行きに乗り換えなければならなくなる。そうなれば、この日の竹富島での採集は、不可能になってしまう。どうしても予定のフェリーに乗らなければならない。気持ちばかりが焦る。幸い西表島の道路は快適そのもの、高速ドライブで何とか出航5分前に到着した。

竹富島は今回の日程のなかで、私にとってメインになるはずの島である。

Ⅲ) 10月11日(2)西表島から竹富島へ

船が大原港を出る頃にはもうひとつはっきりしなかった空模様も、竹富島が近づくにつれて薄日が射すようになった。

実は、この八重山採集行の日程が決まり、後は指折り数えて出発日を待つ間、八重山が今回初めてである蝶友の前平氏に、「竹富島というところは、港に上がれば目の前の荒れ地に咲く各種の花で、蝶が無数に群れていますよ」と、期待に胸膨らませている氏に、何度となく吹き込んだものだった。

しかし、私も内心は心配であった。これまで八重山での採集は3月と5月の春2回だけであり、秋の採集は初めてであったのだから。．．それに今回、10月9日に石垣島入りしてから、バンナ岳・川平、西表島の各ポイントを回って、天候があまり良くなかったせいもあるが、「どうなってんの」と我が目を疑うほど蝶が少なかったのだから。私は、石垣島や西表島はもうどうでもよかった。竹富島に向かう船の中で、神にも祈る気持ちで「どうか竹富島だけはこれまでの島とは違いますように」と願っていたのであった。これまでの2日間、前平氏の顔を見ていると、本人は口に出さないけれど、蝶の少なさにがっかりしている様子がうかがわれた。出発する前に、あれほど吹聴した私の話がすべて嘘のように思われてしまうのではないか、そんな経緯があったので、はっきりいって私は焦っていたのである。

船は、シケで多少の遅れはあったものの午後3時過ぎ、竹富島の港に接岸した。どうだろう、これまで曇り空に薄日が射していた空も一変して、島全体に晴れ間が広がったのである。

レンタサイクルに乗って集落に入った。各家の玄関先に咲くハイビスカスや各種の色とりどりの花に、10数頭のシロオビアゲハが舞っているではないか。目の前の光景を前にして私は、やっと南国の島にやってきた実感を体全体に覚えた。

家並を離れると、防風林に囲まれた荒れ地や畑の縁に咲く花に各種の蝶が、南

国の日差しの下で舞っていた。シロオビアゲハ、スジグロカバマダラの2種が圧倒的に多いけれど、ジャコウ・ベニモン・カラス・アオスジのアゲハ類やリュウキュウアサギマダラ、カバマダラ、メスアカムラサキ、アオタテハモドキ、タテハモドキ、アカタテハ、ヒメアカタテハ、ウラナミシロチョウ、キチョウなどが花から花へと吸蜜に余念がない。林縁では、ルリウラナミシジミがキラキラと翅表を輝かせている。八重山の島では、普通種と呼ばれる種であっても、これだけ多くの蝶に囲まれて採集できれば、日々のうとましいことが別世界のことのようになってしまう。

遠い南の島までやってきたのだから、せめて迷蝶の一つぐらいは採って帰りたい。これまで2度訪れているものの目撃すらできないでいる。3度目の正直といわんばかりに、目を皿のようにして蝶を追っていた。ある墓地でネットを振っていたとき、1頭のキタテハがセンダングサに止まっていた。何だキタテハか、普通種でとりたててネットを振るほどの蝶ではないと思い、目を別の蝶に移そうとした。しかし頭の中では、キタテハ＝八重山諸島では「あれ、何か変だなあ」と、もう一度キタテハに視線を注いだ。『沖縄・八重山蝶採集ガイド』のあるページが頭に浮かんだ。「そうだ、八重山諸島にはキタテハは分布していない」そう思ったときには、すでにネットはキタテハをすくっていた。はたして私は、南からの迷蝶にはまたしても縁がなかったが、笑えるかな北からの迷蝶を手にしたのだった。その日は1頭だけだったが、翌日再び竹富島を訪れ、結局合計7頭採集した。早速帰りの船の中で、キタテハは八重山諸島ではこれまで3度しか採集されておらず、竹富島では初記録ということが確認でき、大喜びした。北であれ南であれ、迷蝶には変わりないと一人悦に入ったことはいうまでもない。後日わかったことだが、この年は、八重山の各島で多数のキタテハが採集および目撃されたようで、一時的に大発生した可能性が考えられるとのことであった。